

感染症・予防接種レター (第79号)

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会では「感染症・予防接種」に関するレターを毎号の小児保健研究に掲載し、わかりやすい情報を会員にお伝えいたしたいと存じます。ご参考になれば幸いです。

日本小児保健協会予防接種・感染症委員会

委員長 多屋 馨子 副委員長 岡田 賢司
菅原 美絵 津川 毅

乾 幸治 三田村敬子 並木由美江
古賀 伸子 三沢あき子 渡邊 久美

2月4日は風しんの日：風しん発生^{ゼロ}をめざし ワクチン接種を推奨しています

2012~2013年に、日本では1万6千人を超える大規模な風しん流行が発生し、厚生労働省は風しんに関する特定感染症予防指針（平成26年厚生労働省告示第122号）を告示し、早期に先天性風しん症候群の発生をなくすとともに、2020年までに風しんの排除を達成することを目標とすると定めた（表）¹⁾。2018年から2019年にかけて5千人（図）²⁾を超える風しんの流行が確認されている。2018年の流行から少し遅れて先天性風しん症候群（congenital rubella syndrome：CRS）が報告され、2018~2019年のCRSの報告数は現在のところ4人である。

風しんウイルスは、*Matonavirus* 科 *Rubivirus* 属に属するRNAウイルスで、エンベロープを有している。罹患すると、発熱、発疹、リンパ節腫脹を特徴とし、

無症状も15~30%みられ、また重篤な合併症併発まで幅広い症状がある。合併症としては、血小板減少性紫斑病（1/3,000~5,000）、急性脳炎（1/4,000~6,000）、関節炎などがあり、妊娠20週頃までの女性が感染すると児に先天性風しん症候群（CRS）が出現する。潜伏期間は14~21日間であり、感染経路は飛沫感染であり感染力が強い（発症約1週間前~発疹出現後1週間程度感染力がある）。治療・予防は対症療法のみで、予防にはワクチンが有効である。清掃は通常の家庭用洗剤での日常清掃でよい。

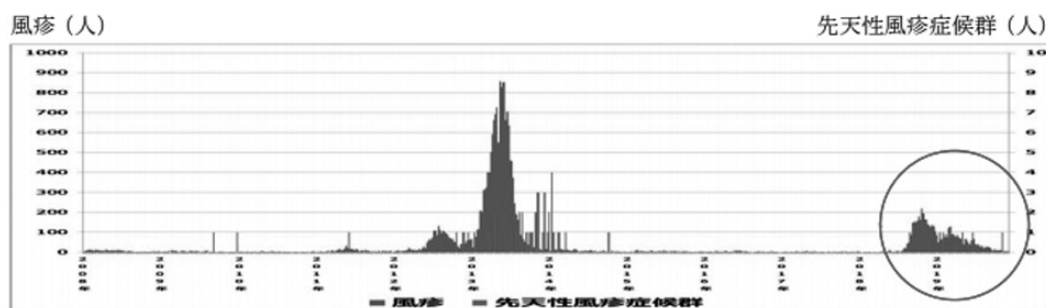
風しんの流行を予防するために、現在の風しんの発生状況等を踏まえ、厚生労働省は風しんの感染拡大防止の観点から予防接種の追加接種を決定した。予防接種法に基づく定期接種の機会が一度もなかった1962年4月2日~1979年4月1日生まれの男性（2019年12月現在40~56歳）について、2022年3月末までの間、原則無料で予防接種を受けられる定期接種の対象とし、市区町村からクーポン券を配布し実施を啓発している。

ワクチンで予防できる風しん、そしてCRSを予防するためには、医療関係者、保育関係者、教育関係者、多数の人々と接触する職種の人、外国からの訪問客と接する機会が多い職種の方は、MRワクチンの接種記

表 目標：CRSの発生をなくすとともに、2020年度までに風しんの排除を達成する

定期予防接種の実施	定期接種率の目標をそれぞれ95%以上とする
抗体検査・予防接種の推奨	普及啓発、自治体に対する抗体検査補助事業を実施、風しん第5期定期接種の勧奨
自治体に対する技術支援	風しん発生手順の手引き等を作成し、自治体に配布

（文献¹⁾より一部改変）



（文献²⁾より引用）

図

録が1歳以上で2回あることを確認して自己の健康管理に役立てて欲しい。また女性は妊娠前に小児期も含めて2回のワクチン接種記録を確認し、もし記録が見つからなかった場合は、風しん予防強化月間である2月中にMRワクチンを受けて、接種後は、自身でワクチンの接種記録を保管していただきたい。

未来の子どもたちを風しんから守り、自らの風しん罹患を予防するために、成人男女がMRワクチンを受けて風しん予防に努めて欲しい。

先天性風しん症候群と診断された赤ちゃんの保育で気をつける点について

先天性風しん症候群と診断された赤ちゃんは、過去の報告³⁾から、飛沫（咳やくしゃみ、発語などで飛ばしぶき）や尿からは、長期間（生後6か月の時点で33.8%、生後12か月の時点で16.9%の児がウイルスを排出）風しんウイルスが検出されることがあるとされている。生後1か月でウイルスが検出されなくなることもあれば、1年以上にわたり検出され続けることもある。現在国内では1か月以上の間隔を空けて、連続して2回ウイルスが検出されなければ排泄なしと判断され、周りの人への感染性はないものと考えられる。そのため、先天性風しん症候群の赤ちゃんは検査で、陰性化の確認検査を実施し、ウイルス排泄がないことを確認するまでは、ウイルス排泄があるものとして、周囲に感染を広げないようにすることが必要とされる。

赤ちゃんは自分から歩き回って周囲に感染させることは考えられないため、日常的に直接ケアをする人が感染予防に注意を払うことと、妊婦への感染を防ぐことが大切である。

赤ちゃんのケアをするときに気をつけること

赤ちゃんのケアをする人は、石鹸を使用して手洗いを徹底し、風しんへの免疫が不十分な場合は予防接種を受けることが必要である。家族の場合、風しんの予防接種の履歴の記録がなかった場合でも、母親が感染したときに一緒に感染していることが多い傾向にあるが、検査で風しんに対する免疫の有無を確認し、抗体価が不十分な場合にはワクチンを接種して免疫をつけておけば安心である。また、同居家族に妊婦がいる場合は、おむつ替え、沐浴、哺乳などの直接のケアは避けるようにすることが必要である。

かぜをひいたとき、ミルクの飲みが悪いとき、眼に

濁りが出てきたときなど、心配なことはかかりつけ医や保健師に相談するようにすることも大切である。

ちゃんと外出の際に気をつけること

ウイルスを排泄していることがあるが、濃厚接触がなければ周囲の人に感染させる心配はない。同じ空間（部屋など）にいただけで感染することはないため、公共交通機関の利用は可能である。外出時におむつ交換が必要になる場合に備え、おむつ交換シートを準備し、交換前の使用に加え、おむつ交換時に外出先でも流水と石鹸でよく手を洗うようにする。手洗いが十分にできない場合には、持ち歩きサイズのアアルコールジェル等で手指を消毒することで代用してもよい。一方で赤ちゃん自身も人混みに出ることで、周りからさまざまな病原菌・ウイルスの感染を受けやすくなるため、公共交通機関等を利用する場合は、できるだけ混雑する時間帯を避け、帰宅後は家族も手洗いを徹底するなど、感染予防に留意が必要である。

予 防 接 種

定期接種、任意接種を含めて、すべての予防接種を受けることが可能である。ただし、児の体調に合わせる必要があるため、接種の可否や接種時期、接種順序などについては、かかりつけ医によく相談しスケジュールを決めることが必要である。

文 献

- 1) 厚生労働省. 風しんに関する特定感染症予防指針
平成26年3月28日（平成29年12月21日一部改正・平成30年1月1日適用）.
- 2) 国立感染症研究所感染症疫学センター. “風疹流行に関する緊急情報：2019年12月4日現在” <https://www.niid.go.jp/niid/images/epi/rubella/2019/rubella191204.pdf>
- 3) Sugishita Y, Akiba T, Sumitomo M, et al. Shedding of rubella virus among infants with congenital rubella syndrome born in Tokyo, Japan, 2013–2014. *Jpn J Infect Dis* 2016; 69: 418–423.

参 考 資 料

- ・米国小児科学会編集（日本語版：岡部信彦監修）. 最新感染症ガイドR-BOOK2018–2021. 日本小児医事出版社, 2019: 705–711. (菅原 美絵)